

【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】
2021年度 最優秀園
社会福祉法人さがみ愛育会 幼保連携型認定こども園
愛の園ふちのべこども園

本園は、これまでの経験の積み重ねの上にとって、主題の構造化を図り、主題「科学する心を育てる」ことに園全体で向き合われました。子どもも保育者も共に、身近な環境について園で語り合い、主体的に探究を深めていく様子がわかります。

事例は、池づくりによって、子どもたちが生き物と触れ合い、豊かな感性が磨かれていくことが実感できる内容となっています。子どもたちが継続的に興味の対象に関わり創造的に学びを深めながら、動物の立場にたって思いやり、生命の原点に立ち、考える教育を試みている様子がみてとれます。ザリガニへの興味関心から、子どもの好奇心や探究が変容するプロセスは大変に興味深く、異年齢の関わりを通して、それぞれが、出会いの中で疑問や死に向き合うなど、ザリガニを科学的に問うだけではなく、共感的に寄り添う姿も育まれていました。子どもの行動に試行錯誤がみられることに注目し、サークルタイムを持つことで、主体的かつ対話的な「科学する心を育む」子どもの姿へと繋がっていく様子は印象深いものでした。

また、職員の会議も、報告中心から話し合いの機会へと変容させ、「語ら場」や「腹を割って話す会」などユニークな場も設けられ、保育者同士が気軽に子どものことを語り合い、コミュニケーションを持てるように工夫されたことは、他園にはみられない取り組みです。

結果、保育者自身が、子どもの何気ない行動を価値ある場面として捉え、主体的にその意図を探ることになり、これら、子どもと保育者の往還的な学びの積み重ねが、子どもの探究の深まりや豊かな感性へ繋がり、保育者自身も主体性、想像性をもった実践へと展開されていました。

わずか数年で、園全体の主題に対する捉え方を大きく変え、園独自の語り合いから生まれた文化を醸成し、保育や環境の創意工夫に繋がったことは、多くの園の参考になることもあわせ、高く評価されました。